生活と態度
―機械が読む『開闢』と『朝鮮文壇』の作品批評用語と批評家―

“Saenghwal” (Ways of Living) and “T’aedo” (Manner):
Critical Terms and Critics in *Kaebyŏk* and *Chosŏn Mundan*

李載然
翻訳：高榮蘭・金景彩

Abstract

Modern literature in Korea, was in its formative years in the 1920s and even writers assumed the role of critics. These writer-critics started appearing in the sections of literary reviews, provided by the two major magazines of the time: *Kaebyŏk* (The opening of the world, 1920-26) and *Chosŏn mundan* (The literary sphere of Chosŏn, 1924-27). With no professional training, what critical terms did they utilize in the review of works? Here, I microscopically probe into the languages they used through the method of computational linguistics. 1) This article extracts frequently appearing words and keywords that are associated with critics. In order to find co-occurring words, I employ an algorithm called “Word2Vec” because it locates words that are physically distant but semantically close. 2) In so doing, I closely read the magazines, trace the contexts of literary reviews, and demonstrate how differently the selected terms of each magazine were used to make sense of literary reviews. This article will, I believe, contribute to revealing the hitherto forgotten terms in history of literary criticism, which were actively used by the writer-critics in the early stage of modern literature in Korea.

Keywords

『開闢』、『朝鮮文壇』、共起語、Word2Vec、生活、態度、文芸批評
Kaebyŏk, *Chosŏn mundan*, co-occurring words, ways of living, manner, literary criticism

訳者まえがき

この論文は韓国近現代文学研究においてデジタルヒューマニティーズを牽引している李載然（蔚山科学技術院教授）によって書かれ、2016年に、学術誌『개념과 소통（CONCEPT AND COMMUNICATION）』に掲載されたものである。韓国語版は全6章の構成である。

１．はじめに
２．分析対象の設定
３．単語の出現頻度と W2V
４．『開闢』と「生活」
５．『朝鮮文壇』と「態度」
６．おわりに

本論文は大きく分けて定量分析と定性分析で構成されている。第２章と３章は定量分析

のパートである。ここでは、主に分析対象の設定や、データの確保方法、「ワードツーベック」(Word2Vec)を利用したリファイン(refine)作業など、分析方法に関する説明が行われている。第 4 章と 5 章ではテクスト分析に軸が置かれ、「態度」という単語が雑誌『朝鮮文壇』においてどのような批評的な機能を担っていたか、この単語を主に使用した批評家は誰なのか、またどのような文脈の中でこの単語が使われていたのかについて議論されている。

現在、日本の人文学領域においても、さまざまなプログラムが活用され、遠読と精読に関する研究方法の模索が行われている。本論文の場合、論文の前半では遠読(distant reading)的な実践が、後半では精読(close reading)的な実践が行われている。本来なら両方は切り離すべきではない。しかし、ここに第 4 章と 5 章を掲載しなかったのは、これらの二つの章が韓国文学、とりわけ批評史に関する深い理解を前提に書かれているからである。今回は筆者の李載然と話し合い、まずは遠読の実践を紹介することを優先した。もし、後半の精読の実践に興味を持っている読者がいるのであれば、ぜひご連絡いただきたい。日本語の翻訳文を提供する。

以下、著者本人による本論文の紹介文である。

筆者による紹介文

この論文は、いわゆるデジタルヒューマニティーズという新しい学問領域の観点から、韓国の文芸批評史を捉えなおしたものである。翻訳者の要請で、本論文を理解するうえで必要な情報を簡単に述べることにした。

この論文では、植民地朝鮮の1920年代に焦点をあて、専業批評家があらわれる前の時代には、作家が批評家を兼ねていたことを確認し、その創作者―批評家たちがいかなる言葉を用いて作品を評価していたのかについて議論した。この議論を展開するためにいくつかの方法を導入した。

まず、文芸批評を丁寧に読み、批評言語が如何に運用されていたのかについて分析を行う方法である。これは文学研究における伝統的な方法の一つであるが、研究対象となるテクストの量が増えてしまうとうまく機能しない方法である。次に、定量的なアプローチといわれる方法がある。批評文を形態素分析が可能な電子テクストに変え、単語の使用頻度を把握する方法である。「作品」、「人物」、「描写」など、見慣れた批評言語が頻出することは確認できるが、頻度だけでは単語が作り出す意味のネットワークを捉えきれない。三つ目は、共起語(co-occurring words)分析によって、探そうとする単語や高頻度語の前後に出現する単語を同時に抽出し、単語の意味を把握する方法である。この方法では物理的に距離が近い単語を取り出すことはできるが、物理的な距離は遠いが意味上の距離が近い単語は取り出しにくいという限界がある。四つ目は、電算機的なアプローチである「単語埋め込み(word embedding)」がある。これは、単語をコンピューターにとって学習しやすいベクトル――数字のマトリックス――に変換する方法である。この方法の一つであるWord2Vecは、分析したいキーワードの周辺に頻出する単語は、キーワードと意味のレベルにおいて繋がっ

ているという前提のもとで、コンピューターに意味のレベルで距離の近い単語を取り出させる学習を繰り返して行う。このような学習を、単語ごとに連鎖的に進めて行けば、最終的には、物理的には遠いが意味的には近い単語までも抽出できるようになる。

本論文は、「単語埋め込み(word embedding)」を韓国の文芸批評にはじめて適用したものである。批評家の名前の隣に表れる単語をword2vecアルゴリズムで取り出し、1920年代の文芸批評史において見過ごされてきた「態度」という日常語が、批評言語に転用(appropriation)される様相を明らかにしたものである。その具体的な内容は本文の結論を参照していただきたい。韓国文学のなかで「態度」がいつまで批評言語として機能していたのかについて、通時的な分析は行っていない。しかし、現代において「態度」は批評言語としてほとんど使われない。本論文で試みた電算機的アプローチは、だからこそ意義がある。過去に流行し、何らかの理由で消えてしまった、特定の批評言語の、つかの間(ephemeral)の生を、コンピューターの力を借りて捉えられたからである。

今後、文学研究におけるコンピューター技術の適用は、分析対象の幅を拡張させ、分析方法を深化させるのに貢献するだろう。とりわけ、今回紹介した「単語埋め込み(word embedding)」方法は、ビッグデータ(big data)を活用してきた既存の文化研究や、ディープラーニング(deep learning)に基づいた自然言語生成(natural language generation)の分野でも使われている分析方法であるため、注目に値する。筆者がこの論文をまず紹介しようとした所以もここにある。自然言語生成を主導する言語モデル(language model)は、コンピューターが与えられた文章を事前に学習し、単語(token)のシークエンスに確率を割り当てるモデルである。これを通じてコンピューターは、任意の単語が与えられれば、それに続く単語を推論できる。言語モデルの事前学習の量が限りなく増えたことで、最近コンピューターは人間のものと区別がつかない文章を生成するようになった。

この言語モデルを文学研究に導入することで、我々はどのような研究ができるようになるのだろうか。例えば、BERT(Bidirectional Encoder Representations from Transformers)を活用した検閲研究が考えられる。ランダムに単語をマスキングし、コンピューターはその前後の単語からマスキングされた単語を推測する学習を行う。このプロセスは、検閲で削除された単語を、文脈を考慮して推測する人間によるプロセスに似ている。BERTを活用することで、検閲されたテクストの日韓比較研究を行えるのではないだろうか。このような新しい研究テーマは、今後文学研究の新しい地平を開いてくれるだろう。この論文がその地平を開くのに少しでも貢献できれば、筆者としては嬉しい限りである。

1．はじめに

文芸批評の登場は文学制度の成熟を前提とする。なぜなら、文学制度内で作品の創作が続かなければ、また作品への批判的な解釈を可能にする理論の共有がなければ、文芸批評はそもそも成立しないか、印象批評のレベルにとどまるからである。このような時間の幅を意識すると、植民地朝鮮において、1920 年代はじめに同人雑誌制度を媒介にあらわれた創作者たちが、1920 年代半ばに入ってから創作者―批評家として活躍するようになったのは、それほど驚くべきことではない。姜鎔勳の指摘通り、文芸批評は 1924 年から 26 年のあいだ、雑誌『開闢』（1920-1926）と『朝鮮文壇』（1924-1927）が「月評」や「合評」などの批評形式をめぐり、対立的な議論を展開していた時期に本格化した。その過程で、廉想渉、玄鎮健、羅稲香、金基鎮、朴英熙らの作家たちが創作者―批評家へと生まれ変わった[(1)]。

しかし、彼らは専業批評家になるための専門的な訓練を受けていなかった。ならば『開闢』と『朝鮮文壇』の創作者―批評家たちは、どのような言葉を使い、文芸批評を書いていたのだろうか。例えば、『開闢』において「ブルジョア」文芸の旗手であると揶揄されていた李光洙は、はたして「ブルジョア」の言葉で文芸批評を書いていたのだろうか。一方「プロレタリア」文芸の先駆であった朴英熙は、はたして左派的な作品に相応しい言葉を作り出し、磨き上げていたのだろうか。もしそうでないとすれば、彼らはどのような言葉をもって創作と批評のあいだを行き来していたのだろうか。彼らの批評言語には、現代の批評家たちの批評言語からは消えてしまったり、あるいは日常的になりすぎて批評言語として感知できなくなったりしたものが隠れているのではないだろうか。

植民地時代の批評をめぐるこれまでの研究は、大きく三つの流れに沿って、伝統的なテクスト解釈から文学社会学的な研究へと展開してきた。一つ目は、文学史における批評に焦点を当て、批評の内容と形式およびその意義を時代別にわけて論じたものである。そこからは、主に文芸の流派とその力関係に注目した研究が見られた[(2)]。二つ目は、作家論的な観点から、特定の批評家たちを中心軸としながら、彼らの個人的な葛藤やライバル意識、文芸理論に対する立場の違いに注目したものである。主に批評をめぐる論争の文学的な意味を歴史的な文脈に照らして捉える研究がこれにあたる[(3)]。最後の三つ目は、批評研究の分析単位を個人や集団、あるいはマクロな文芸批評ではなく、特定の概念のようなよりミクロなものに設定して分析を行う概念語／概念史研究である。孫禎秀の「概念史としての韓国近代批評史」や金賢珠の『「社会」の発見：植民地時代の「社会」に対する理論と想像、そして実践』などの研究は、「個人」、「社会」、「文学」、「芸術」など、創作と批評に必要であった核心的な概念語をミクロな観点から分析する一方で、その概念の文壇への影響にも注目し、文

(1)　강용훈、2011、「월평의 형성과정과 월평방식의 변화 양상」、『한국문예비평연구』第34巻、379-380頁。

(2)　김윤식、1976、『한국 근대문예 비평사연구』、일지사；김영민、1999、『한국 근대문학 비평사』、소명출판。

(3)　김윤식、1989、『임화연구』、문학사상사；김윤식、2008、『백철연구』、소명출판。

学社会学的な領域へと批評研究を拡張させた[4]。特に、1920年代に登場した合評会という批評形式に注目し、『朝鮮文壇』を中心に使われた「実感」という批評用語が、のちの左派文芸のいわゆる内容／形式論争に影響を与える過程を分析した姜鎔勳の論文は、批評用語をめぐる研究の可能性を示唆するものであった[5]。

本論文は、上記の三つ目の方法論の延長線上で、言語学的な定量分析の方法を活用し、創作者―批評家が用いていた当時の批評用語をミクロな観点から分析するものである。「実感」や「生活」のようなキーワードが、批評の場においてどれほどの頻度で用いられていたかについては、これまでの研究で明らかにされていない。本論文ではそのような状況を踏まえ、①『開闢』と『朝鮮文壇』における文芸批評を取り出し(text mining)たうえで、自然言語処理(NLP)をし、頻出する単語の頻度を調べる。それに基づいて作成される頻出用語リストは、これまで批評研究においてすでに注目されてきた特定の単語が、当時の批評家たちが無意識的に共有していたものなのか、あるいは特定の批評家たちの間でのみ用いられた一種の個人言語(idiolect)なのかを明らかにするための手がかりになると考える。②①のプロセスによって頻出単語を単純比較することからさらに進み、特定の批評家の名前と一緒に出現する頻度の高い単語(共起語、co-occurring words)を調べる。共起語探しに使用するアルゴリズムは「ワードツーベック」(Word2Vec、以下W2V)である。このプログラムには、研究対象である単語と物理的に近い共起語だけでなく、物理的には遠いが、意味的に近い単語をも探し出せるという利点がある。この機能を使い、今はほとんど使われないが、1920年代の批評実践においては大切な役割を担った可能性のある批評用語を見出す。③最後に、『開闢』と『朝鮮文壇』の文芸批評から代表的な批評用語を取り出し、個別的かつ具体的な文脈を意識しながら、用法上の違いを明らかにする。

本論文は『開闢』における「生活」、『朝鮮文壇』における「態度」という単語に注目するものである。いずれも出現頻度上位25位内に入る単語だが、その批評的な用法には違いがある。結論を先に述べると、「態度」は作品の内容分析にこだわる批評的な実践に深く結びついており、「生活」は作品の視点人物が経験する具体的な出来事や背景を、作品の外側の問題に関連づける形で、社会的、歴史的に言説化しようとする傾向との関連度が高かった。とりわけ日常語であった「態度」を批評用語として定着させた廉想渉は、雑誌『廃墟』の時代から培ってきた批評的な知見を『朝鮮文壇』の合評会で開花させた。彼は「態度」を様々なレベルで使い分ける。例えば、当時の主な争点であった批評の主観性と客観性、文学的な価値の問題――「力」のある文学とは何か、作品と作者の思想との関係などをめぐる問題に積極的に介入し、批評家としての自らの地位を確かなものにした。

(4) 손정수、2002、『개념사로서의 한국 근대 비평사』、역락；김현주、2013、『사회의 발견：식민지기 '사회'에 대한 이론과 상상、그리고 실천』、소명출판。

(5) 강용훈、前掲論文、369-402頁。

2．分析対象の設定

『朝鮮文壇』で合評会は、小説作品を中心に行われていた。また『開闢』の月評や四分期評、年評もやはり小説を主に扱っていたため、本論文でも主な分析対象を小説をめぐる批評に設定した。分析の際には対象となる批評を大きく4種類(以下①-④)に分け、それに含まれないものを⑤に分類した。

① 小説家に対する文芸批評
② 雑誌主催の懸賞小説の審査評
③ 小説作法・文芸論で紹介された文芸批評
④ 作家論のなかで取り上げられた文芸批評。
⑤ 批評家に対する批評

例えば、①には廉想渉「今年の文壇「今年の小説界」」(『開闢』第42号、1923.10)、方仁根「甲子年小説界一瞥」(『朝鮮文壇』第4号、1925.1)、「朝鮮文壇合評会1～6回」(『朝鮮文壇』第6・7・8・9・10・11号、1925.3～1925.9)シリーズなどが含まれる。『開闢』は朴鍾和が、『朝鮮文壇』は廉想渉・玄鎮健・金基鎮・羅稲香などが主なメンバーであった。②新人作家の発掘の場となっていた懸賞小説の選評は、『開闢』では玄哲・廉想渉・朴英熙が、『朝鮮文壇』では李光洙が主に担当した。特に李光洙の活躍は目覚ましいものであった。彼のによって、蔡萬植(「三つの道へ」、1924.12)、朴花城(「秋夕前夜」、1924.12)、韓雪野(「その日の夜」、1925.1)らがデビューできた。③金東仁は『朝鮮文壇』に連載した「小説作法」(『朝鮮文壇』第7・8・9・10号、1925.4～7)において、自分自身や他の作家たちの描写方法について分析した。また『開闢』の朴英熙は、「新傾向派の文学とその文壇的な地位」(『開闢』第64号、1925.12)において、趙明熙・李箕永・崔曙海らの作品における下層階級の飢餓や疎外、怒りの爆発に新たな意味を与えた。④『朝鮮文壇』の文芸批評は、それまでの同人雑誌によく見られた、作家たち同士のお互いに対する「印象記」から一歩進み、作品にまで言及する傾向をみせた。例えば、方仁根は「金東仁はどのような人なのか」(『朝鮮文壇』第9号、1925.6)という企画記事で、田榮澤・金億らが概略的に言及した金東仁の作品に対する批評にまで興味を示した。⑤このような文芸批評に含まれない、批評家に対する批評などはメタ批評として分析対象に含めた。例えば、『開闢』誌上で展開された金億と朴鍾和の論争[(6)]からは、擬古批評や印象批評など、批評の細かい分類に対する意見の違いが見られた。また、『朝鮮文壇』で金基鎮が朴英熙に宛てた「無産文芸作品と無産文芸批評」(『朝鮮文壇』第19号、1927.2)には、無産文芸批評の必要条件が記されており[(7)]、それが文芸批評以上に重要であると判断したため分析対象に含めた。

(6) 김억、1923、「무책임한 비평」、『開闢』第32号、1-5頁;박종화、1923、「항의같지 않은 항의자에게」、『開闢』第35号、72-77頁。

(7) 김기진、1927、「무산문예작품과 무산문예비평」、『朝鮮文壇』第19号、7-17頁。

上記のような分類に基づき、『開闢』からは合計25編、『朝鮮文壇』からは合計27編の文芸批評を選び出した。『開闢』に発表された文芸批評を分析する際には、「韓国歴史統合情報システム」というウェブサイトの定期刊行物の項目にある電子化された資料を利用した(8)。『朝鮮文壇』の場合、電子資料がないため、復刻版をコンピューターに直接転写して分析のための資料を作成した。資料を揃える際には、両雑誌の間で分析対象となる批評の分量に大きな差が出ないように調整した。また、一次資料の対象と範囲を限定した後、複数の筆名を使い分ける作家がいた場合、それを一つの作家名に統一した。研究対象が文芸批評であったために、批評家および批評対象の作家・作品が置かれた文脈を整理する必要もあった。

その方法について簡単に紹介する。まず「１月創作界総評」において、金基鎮が、朴英熙の短編小説「戦闘」(『開闢』第55号、1925.1)について論評している以下の文章に注目してほしい。

> 「スンボク」に、自分の家が貧しくなり、自分が饅頭を売るようになった原因を(……)気づかせ、実に「スンボク」の(……)叛逆の意識を呼び覚ますのに十分であった。私はここで作者の現社会に対する憎悪の態度を見る。とにかくこの作品は、もう少し流錬され整頓されなければならないという欠点はあるものの、新年の創作界で、このまま最も注目にあたいする作品になるだろうと私は確信する。(9)

上記の引用で、「私」は金基鎮、「作家」は朴英熙、「この作品」は朴英熙の作品「戦闘」を指す。単語の指し示す対象を、文脈に基づいて特定せずにコーパス分析を行うと、「私」、「作家」、「作品」などの単語がたくさん取り出されるはずだが、その頻度の高さが意味するところを明らかにすることはできない。したがって、文脈に基づいて指示語を適宜変えなければならないのだが、その前にもう一つ考慮しなければならないのは、金基鎮と朴英熙が『開闢』と『朝鮮文壇』において作家だけではなく批評家としても活躍していたことである。

金基鎮は、上記の文章を批評家の立場で書いている。しかしよく知られている通り、彼は「若い理想主義者の死」(『開闢』第60・61号、1925.6～7)などの小説を発表した作家でもあった。一方で朴英熙は「戦闘」の他にも、「二重病者」(『開闢』第53号、1924.11)、「猟犬」(『開闢』第58号、1925.4)などの短編小説を書いた作家として上記の批評に取り上げられているが、同時に彼は「新傾向派とその文壇的な地位」(『開闢』第64号、1925.12)といった文芸批評を発表する批評家でもあったのだ。したがって、「私」を金基鎮に、「作家」を朴英熙に変える単純なやり方だけでは、「批評家・金基鎮」本人が用いる単語と、彼が他の批評家によって「作家・金基鎮」として取り上げられ、批評される際に用いられる単語のあいだの区別がつかなくなってしまう。朴英熙についても同様である。ゆえに、特定の作家が批評家としての役割をしている時は、作家の名前の横に「(批)」をつけ、同じ人物が小説家として批評の中で

(8)　http://www.koreanhistory.or.kr/directory.do?pageType=listRecords&khSubjectCode=KH.05.01.003。

(9)　김기진、1925、「1월 창작계 총평」、『開闢』第56号、2-3頁。

取り上げられている時は、「(作)」をつけることで、その役割の違いがわかるようにした。その結果、上記の引用は以下のように修正し、コーパス分析を行うこととなった。

> 「スンボク」に、自分の家が貧しくなり、自分が饅頭を売るようになった原因を(……)気づかせ、実に「スンボク」の(……)叛逆の意識を呼び覚ますに十分であった。金基鎮(批)はここで朴英熙(作)の現社会に対する憎悪の態度を見る。とにかく『戦闘』は、もう少し流錬され整頓されなければならないという欠点はあるものの、新年の創作界で、このまま最も重みのある『戦闘』になるだろうと金基鎮(批)は確信する。

上記のように単語をリファイン(refine)した上でコーパス分析を行なった。さらにそれをもとに、抽出された単語の出現頻度と、特定の単語と同時に出現する単語(共起語)の分析を行った。

3. 単語の出現頻度とW2V

単語の出現頻度の確認は単純な計算であるが、あるテクストのなかに頻出する単語の一覧を大まかに把握するために有効である。[表1](次頁)は、『開闢』と『朝鮮文壇』で頻出する上位25個の単語を比較したものである。表の1行目について、左から順に説明する。まず「全体」となっているのは、『開闢』から選別した25編の批評と『朝鮮文壇』からの27編の批評の全てを指す。その次に「開闢」と「朝鮮文壇」という項目は、それぞれ『開闢』の批評と『朝鮮文壇』の批評を指す。ここでは予想通り、文芸批評の対象である「作品」や「作家」、そして「小説」のようなジャンル名が頻出した。

「全体」を見ると、「作品」、「小説」、「作家」のような文学関連の単語の下に「生活」が入っている。「生活」は文学史の枠で考えるべき重要な単語である。これは一連の小説に、殺人、自殺、放火などの極端な方法で社会に対する怒りを露わにする主人公が登場したことを、新たな文学的な傾向として説明し、理論化する際に用いられることの多い文芸用語である[(10)]。「生活」は、「全体」で5位、「開闢」で8位、「朝鮮文壇」で11位を占めており、すべての項目において出現頻度の高い単語であった。これは驚くべき結果である。なぜなら文芸批評でよく使われる「主人公」、「技巧」、「描写」などの単語が頻出するだろうという予想とは裏腹に「生活」の方が多用されたことを意味するからである[(11)]。

---

(10) 홍정선、1981、「신경향파 비평에 나타난 생활문학의 변천과정」、서울대 석사학위 논문;박상준、2000、『한국근대문학의 형성과 신경향파』、소명;이철호、2008、「신경향파 비평의 낭만주의적 기원—김기진과 박영희를 중심으로」、『민족문학사 연구』第38号、234-263頁。

(11) 後に詳述するが、本論文では『開闢』における「生活」という単語と、『朝鮮文壇』における「態度」という単語に注目する。「主人公」、「技巧」、「描写」などの単語が頻出したのは確かであるが、批評によく使われたそのような単語についてはあまり注目しなかった。その代わり、文芸批評の機能を担っていたと思われる日常語を取り出し、具体的な文脈における用法を確認した。その理由は1920年代のはじめと半ばは、まだ文芸理論が定着していなかった時期であったからである。批評家たちは文化的な学習を通して習得した言語以外にも、日常的な言語をも文脈を意識しながら批評用語として使っていたのではないかと考えた。もちろんこれ

[表1]『開開』と『朝鮮文壇』の上位頻度語比較

順位	全体		開闢		朝鮮文壇	
	語	頻度	語	頻度	語	頻度
1	作品	611	作品	297	作品	314
2	小説	263	芸術	136	廉想渉（批）	146
3	作家	247	小説	133	作家	135
4	芸術	168	作家	112	羅稲香（批）	134
5	生活	157	文壇	105	玄鎮健（批）	132
6	廉想渉（批）	154	朝鮮	94	小説	130
7	読者	149	李光洙（作）	90	方仁根（批）	130
8	描写	147	生活	80	梁建植（批）	97
9	金基鎮（批）	143	批評	78	金基鎮（批）	86
10	玄鎮健（批）	136	朴鍾和（批）	77	金東仁（作）	83
11	羅稲香（批）	134	描写	72	生活	77
12	主人公	134	読者	72	読者	77
13	朴鍾和（批）	133	主人公	63	描写	75
14	文壇	132	思想	59	態度	73
15	朝鮮	132	愛	58	主人公	71
16	方仁根（批）	130	創作	57	技巧	70
17	表現	118	金基鎮（批）	57	表現	63
18	批評	118	表現	55	無産者	60
19	愛	114	傾向	52	人物	59
20	技巧	114	社会	52	性格	57
21	態度	114	文士	49	愛	56
22	金東仁（作）	111	文学	48	朴鍾和（批）	56
23	創作	105	意味	47	合評会	56
24	文学	102	心	45	文学	54
25	性格	101	性格	44	心理	52

「全体」の上位25位には批評家の名前が多数含まれている。『朝鮮文壇』の合評会で活躍していた廉想渉、玄鎮健、羅稲香と、『開闢』で月評を担当することの多かった金基鎮、朴鍾和、そして『朝鮮文壇』で合評欄が廃止になったあと、編集者として文芸批評を担当していた方仁根などである。彼らの名前の方が、「朝鮮」や「文壇」のように、文芸批評でたくさん使われそうな単語よりも頻出したことは驚くべき結果である。おそらくこれは、原文の文脈に基づいてあらかじめ批評の主体を特定するリファイン(refine)作業を行わなければ得られない結果である。

興味深いのは、上位25位のなかに李光洙の名前が見当たらなかったことである。李光洙(批)は、計58回登場し、52位にランクされている。彼が合評会にはほとんど顔を出さなかっ

は仮定に過ぎない。検証のためには、今後もう少し比較言語学的な研究が必要である。例えば、本論文で日常語と判断した「態度」はすでに日本では批評用語として使われていた。もし、日本留学を経験した廉想渉が、それに影響されていたとすれば、これもやはり学習された言語として考えるべきであろう。このような問題を解決するために、定量分析を適用したマクロな観点からの韓・中・日の批評用語に関する研究が必要であると思われる。

た(1回のみ参加したものの沈黙を守った)ことを勘案すれば、この頻度はむしろ高い方である。しかし、李光洙が懸賞文芸の選者として有名であったこと、また『朝鮮文壇』を創刊し、第4号まで主宰を務めていたことを考えると、この結果はやはり予想外のものである。

「生活」とともに「全体」の項目で目立つ単語は、21位の「態度」である。114回も出現し、「愛」や「技巧」と同じ頻度を示している。文学研究者にとって「態度」は、例えば「闘争期にある文芸批評家の態度」(『朝鮮之光』1927.1)というタイトルからも明らかであるように、1920年代後半の左派的な文芸理論を連想させるものである。まだ文芸理論の思想的な分化が本格化していない1920年代半ばの『開闢』と『朝鮮文壇』では、さほど注目されてこなかった単語のはずである。しかし、今回の調査の結果によると「態度」は高い頻度(全部で114回)で出現している。しかも、『開闢』(41回、30位)より、『朝鮮文壇』(73回、14位)の方に2倍ほど多く出現していることから、「態度」がこれらの雑誌の非対称な関係を示す単語であることがわかる。

なぜ「態度」は『朝鮮文壇』の方により頻出したのだろうか。もしかすると『朝鮮文壇』で「態度」が、批評とは関係のない日常的なレベルでの生き方や、仕事との向き合い方を意味するものとして用いられていたからかもしれない。だとすれば『開闢』ではどのような意味で使われていたのだろうか。それについては、高頻出単語と合わせて考えてみたい。まず注目すべきは、「李光洙(作)」、「思想」、「傾向」などの単語が目立ったことである。作家「李光洙」が、『開闢』の主な批判対象であったことはよく知られている。特に朴英熙は『開闢』の文芸欄の部長になった1925年1月以降、李光洙に対する批判的な態度を剥き出しにした。例えば、「李光洙論」(『開闢』第55号、1925.1)のような特集記事を企画し、李益相とともに李光洙の小説を、恋愛だけを追う「遊戯の文学」と批判したのである。また朴英熙は、李光洙の文学を現実にそぐわない旧世代の文学であると規定し、それに代わる到来すべき文芸として、より思想的な「新傾向派」を褒め称えた。朴英熙は、金基鎮とともにこの「新傾向派」文芸に期待を寄せていたのである。「李光洙(作)」、「思想」、「傾向」などの頻出語は、『開闢』における、このような流れを反映している。一方『朝鮮文壇』では、多くの批評家の名前が上位を占めていることがわかる。例えば、廉想渉、羅稲香、玄鎮健、梁建植、方仁根のような合評会欄で活躍した批評家と、朴鍾和、金基鎮のように、他の批評家との論争を通して批評の定義や左派文芸の形式的な要件を唱えた批評家たちが含まれている(12)。合評会の形式は、批評家たちの対話を再現しながら、特定の作家の作品をまとめて批評する方法をとっていたために、批評家の名前の方が、批評用語よりも頻出した可能性がある。

批評用語については、前述の「態度」とともに「無産者」という語にも注目する必要がある。「無産者」は60回(18位)も出現するが、それは『朝鮮文壇』の批評が、「ブルジョア」文芸だけを対象にしていたわけではないことをあらわす。それと同時に、左派的な文芸批評を主導していた金基鎮が合評会にはほとんど参加しなかった点を意識すると、左派的な文芸という話題は、合評会出席者の主な関心領域ではなかったか、あるいは合評という形式的条件

(12) 注6と7を参照。

に合わなかった可能性がある。ここまでの作業は、『開闢』と『朝鮮文壇』における高頻度語を媒介に、これまで文学史や批評史において忘却されていた単語を取り出せた点において意味があった。

それでは分析の方向を少し変えてみよう。「態度」は『朝鮮文壇』に頻出するが、それははたして批評の文脈で使われていたのだろうか。批評用語として使われていたかどうかは、二つの雑誌を丁寧に読み、その単語が使われた文脈を掘り起こせば、明らかにすることは可能である。その段階に入る前に、定量分析のレベルでそれを間接的に確認することはできないだろうか。この問いは、特定の単語と頻繁に共起する単語を分析する作業と関わっている。例えば『開闢』、『朝鮮文壇』の批評家たちと共起する特定の単語を抽出することができれば、少なくともその語群は、批評家の発話によって批評的な文脈で使用されたと推論できるからである。この共起語分析のいくつかの方法のうち、ここではW2Vというアルゴリズムを使用したい。

W2Vは、人工神経網研究から誕生した(13)。このアルゴリズムは、類似した位置に出現する単語は、文脈的に近い意味をもつという前提を基盤とする。研究の対象語を中心に、その近く(前後2～10単語程度)に出現する単語を関連語として認識させ、固有のアルゴリズムとして学習させる過程を繰り返す(14)。この反復学習を通して、関連語群は近いベクトルをもつものとして表現させ、それを図などで視覚的に示すことができるのである。

例えば、「今日、晴れた天気は人の心をウキウキさせる」という文章を形態素分析すると、「今日／晴れ／た／天気／は／人／の／心／を／ウキウキ／させる」のように分けられる。研究の対象語が「天気」であれば、個々の単語を、その近くに出現した単語と類似した意味をもつものとしてコンピュータに学習させ、最終的にどの単語が「天気」と類似した意味をもっているのか抽出できるようにする。結果はベクトル値として出力されるが、図を使うと、その値は「天気」の近くにあらわれる「点」で示されることがわかる。つまり、「天気」と類似した意味をもつと学習された単語を見つけさせることで、物理的には離れていても、意味的には近い単語を研究対象語と結び合わせることができるのである(15)。

本論文では、W2Vを回し、『開闢』と『朝鮮文壇』の批評家の名前と共起する単語を調べた。[表2](次頁)はその結果であるが、5つの単語を基準に学習をさせた後、批評家の名前を入れた結果である。批評家の名前に意味的に近い単語は、類似度が「1」に近い。表からわかるように、本研究でW2Vを使用する最大のメリットは、個人別に批評家と共起する単語の一覧を確認することができるところにある。それによって、批評家自身が気づかずに使用した批評用語を抽出することができる。さらに、研究者が興味をもっている批評用語(あるいは批評に使える日常語)が、どの批評家と共起しているのか探すこともできる。

(13) Tomas Mikolov, et. al. “Efficient Estimation of Word Representations in Vector Space,” 2013, 1, arXiv preprint arXiv:1301.3781. https://arxiv.org/pdf/1301.3781v3.pdf

(14) W2Vに関する簡単な説明は、次のサイトを参照。http://newsight.tistory.com/212

(15) W2Vを適用した研究の事例は、정효정・배정환・홍수린・박찬웅・송민、2016、「정치적 이념에 따른 트위터 공간에서의 집단 간 의견차이 분석」、『한국언론학보』第60号、269-302頁を参照。

[表2] W2V の結果、『開闢』の主な批評家を対象とした上位20個の共起語

朴英熙（批）		金基鎮（批）		朴鍾和（批）		生活	
語	類似度	語	類似度	語	類似度	語	類似度
朴吉洙	0.453396	李箱	0.507511	金億（批）	0.794235	作品	0.46725
郷土	0.449212	朱耀燮	0.490851	抗議	0.748484	車夫	0.43012
破産	0.429242	幻想	0.480661	金億（作）	0.693061	文芸	0.428973
労働者	0.409838	動機	0.463995	反駁	0.63256	所有者	0.423662
色彩	0.398327	目の前	0.459952	作品	0.572926	母	0.40974
学生	0.397092	忙しい	0.456354	批評	0.560273	創造	0.409733
解放	0.394173	可愛い	0.450714	說理	0.549868	冷静	0.405326
不足	0.391816	発見	0.4428	リズム	0.546263	労働者	0.399624
突然	0.387483	月評	0.430412	偏見	0.503288	朝鮮	0.3985
影響	0.386951	腕前	0.429459	苦心	0.482535	ミョンホ	0.39714
悲しい	0.382641	会話	0.425212	心	0.482077	女人	0.395288
申弼熙	0.374666	描写	0.422191	詩想	0.47617	田舎	0.388419
娯楽	0.365808	最近	0.417523	梁柱東	0.455153	鬱憤	0.381916
同人	0.362737	技巧	0.413796	詩評	0.446594	展開	0.380029
主人	0.355208	空気	0.413339	消え	0.434649	悲惨	0.37893
実利	0.347735	注文	0.402831	観念	0.423988	労働	0.376074
顔	0.347495	作家	0.394778	前編	0.423593	思想	0.372052
実際	0.34553	反逆	0.392276	良人	0.421695	失う	0.371148
李光洙（作）	0.344483	金雲汀	0.392262	評する	0.419237	老農	0.368126
味わう	0.343282	金東仁（作）	0.389337	不安	0.411379	ロシア	0.361478

上記の結果には、これまでの雑誌『開闢』の研究においてよく知られている情報だけではなく、見落とされてしまったものも含まれている。まず、朴英熙の場合、彼が選評を書いた朴吉洙や申必熙と共起した。また、彼が「遊戯文学」という名で攻撃した李光洙も抽出できた。朴吉洙の「土を食べる人々」に対する批評での「郷土」文芸をめぐる議論や、宋影の小説に寄せた「労働者」、「解放」に対する期待も図を通して捉えることができた。

それに対し、金基鎮の場合、少し意味づけがしにくい単語が共起した。それは、「이상(イサン)」という単語である。ハングル表記では同じ音価をもつこの単語は、①規準より上の範囲を指したり、すでに起きてしまった出来事について「…からには」という意味で使われたりする「이상(以上)」、②未来の夢や、人が心に描き求め続けるそれ以上望むところのない完全なものを意味する「이상(理想)」などのさまざまな意味で使われるものである。①と②がともに、「金基鎮」と類似度(similarity)の高い単語として出現した。その他にも「幻想」、「描写」、「可愛い」、「技巧」が出現しており、プロレタリア文芸の担い手であったとは思えない単語が共起していた。ただし、彼が下層労働者の生活をリアルに描写した点を高く評価した朱耀燮(「車夫」『開闢』第58号、1925.4)が上位に見られる点は、ここでの結果の信頼度を保証してくれる。

朴鍾和に関する結果は、金基鎮の結果よりも信頼度が高い。金基鎮と「批評の主観性と客

観性」論争を繰り広げた「金億(批)」や、朴鍾和が批評した「金億(作)」、その論争の過程で発話された「抗議」のような単語、また二人の論争を終わらせた「梁柱東」、その他に「リズム」「詩想」のような単語が共起している。

[表2]から、『開闢』における高頻出語のうち上位にあった「生活」が、他の批評家たちの共起語として出現しなかったことに驚いた。これは「生活」の共起語からも確認できる。作品の関係語として、朱耀燮の小説「車夫」と、李益相の小説「土の洗礼」(『開闢』第59号、1925.5)の主人公である「ミョンホ」という単語は出現するが、批評家の名前は一切登場しない。物理的にだけではなく意味的にも近い単語を抽出するW2Vを使用したにもかかわらず、批評家と「生活」が、あるいは「生活」と批評家の名前が共起しなかったのはなぜだろうか。

考えられる一番目の理由は、このアルゴリズムに与えられたテキストデータが不十分だったかもしれないということである。W2Vは学習できる語が多ければ多いほど分析の精度が高まる(16)。だとすれば、テキストデータが一定数以上にならなければ良い結果が得られないはずである。本論文で利用した『開闢』の文芸批評25編、36,000語と、『朝鮮文壇』の文芸批評27編、37,000語は、文脈に合った結果を得るには不十分だったのではないだろうか。他に理由として考えられるのは、「生活」という単語が日常語であったために、批評家が批評用語として転用するケースより、一般的な文脈での「生活」が、他の日常語と共起することが多かった可能性である。いずれにせよこの2つの仮説は、『朝鮮文壇』における批評家と「態度」の関係に目を向けさせる。

[表3](次頁)は、『朝鮮文壇』によく登場する批評家を対象に、W2Vを通して抽出した上位20個の共起語である。「態度」という単語が金基鎮、羅稲香、廉想渉ともっとも共起しており、この時期の批評家にとってかなり意味のある単語であることがわかった。「이상(イサン)」のような、『開闢』の月評において金基鎮と共起していながら、共起の理由を明らかにすることが難しい単語とは異なり、「態度」からは金基鎮のプロレタリア文芸批評家としての様子がうかがえる。『朝鮮文壇』における金基鎮の批評は、文芸批評というよりは、朴英熙と論争するためのものであったことを踏まえると、二つの媒体において金基鎮と共起する単語の違いは、文芸批評ではなくメタ的な批評言語という、ジャンルの違いによるものである可能性も意識しなればならない。また、合評会に出席した他の批評家たち、例えば羅稲香(8位)、廉想渉(6位)、方仁根(16位)が、「態度」という項目において最上位に現れることにも注目しなければならない。ここから、金基鎮が「無産文芸批評家としての態度」(17)

(16) 김우주・김동희・장희원、2016、「Word2vec을 활용한 문서의 의미확장 검색방법」、『한국콘텐츠학회 논문지』第16(10)号、689頁。

(17) 김기진、1927、「무산문예작품과 무산문예비평」、『朝鮮文壇』第19号、7-17頁。朴英熙は、1927年1月に『朝鮮之光』に発表した「투쟁기에 在한 문예비평가의 태도」で、プロ文学の小説は、建築物ではなく、階級意識という屋根だけ存在しても可能であると主張しながら、金基鎮に対し、明確な階級意識を示すことを要求した。それに対し、金基鎮は、自身の階級意識が明確ではなかったことは認めながらも、朴英熙の批評に反論を展開し、「宣伝文学も文学上の用件を備える必要がある」という立場を貫いた。

を論じた際の「態度」とは異なる「態度」の位相――合評会に参加した批評家たちが用いた批評用語として「態度」――が存在する可能性を読み取ることができるからである。それは「態度」の意味上の共起語として、廉想渉や羅稲香が金基鎮よりも上位にあるところからも感知できる。羅稲香や廉想渉の共起語としては、批評用語よりも批評家の名前が上位に出現しているが、これは合評会という文章の形式が会話文を再現する形で作られているからである。すなわち、複数の人が集まり多くの作品を扱うことになる場合には、発話者の名前を明記する必要があるのだ。このようにして出現した批評家の名前を除き、「合評会」、「朝鮮文壇」、「作品」などの固有名詞や抽象語に次いで、批評用語としての機能を担う「態度」が出現したことは注目すべき結果である。それは『朝鮮文壇』の合評会に関する研究では見過ごされたものである。

[表3] W2V の結果―『朝鮮文壇』の主な批評家を対象とした上位20個の共起語

金基鎮（批）		羅稲香（批）		廉想渉（批）		態度	
単語	類似度	単語	類似度	単語	類似度	単語	類似度
文学	0.570352	方仁根（批）	0.720239	羅稲香（批）	0.717741	廉想渉（批）	0.587648
宣伝	0.561191	廉想渉（批）	0.717741	玄鎮健（批）	0.702533	羅稲香（批）	0.489719
無産	0.553228	玄鎮健（批）	0.666233	梁建植（批）	0.675403	金基鎮（批）	0.482089
マルクス	0.544192	梁建植	0.592149	方仁根（批）	0.615723	技巧	0.464422
無産者	0.524258	作品	0.53977	合評会	0.604229	反動	0.460352
批評家	0.501871	合評会	0.539051	態度	0.587648	作品	0.458214
態度	0.482089	朝鮮文壇	0.504327	作品	0.530479	批評家	0.456079
論理	0.47588	態度	0.489719	朝鮮文壇	0.518323	生活	0.446223
文芸批評家	0.464853	難しい	0.481486	金東仁（作）	0.484557	闘争記	0.442919
抽象	0.45026	暗い	0.46384	生活	0.445143	文芸批評家	0.437891
始終	0.443441	金東仁（作）	0.461185	参加	0.44074	思想	0.435335
闘争記	0.441368	責任	0.442462	難しい	0.43079	マルクス	0.426401
本質	0.434398	朴鍾和（批）	0.414016	作家	0.4277	方仁根（批）	0.422632
否定	0.432911	参加	0.407215	読者	0.427545	感じる	0.422457
在来	0.432851	描写	0.40684	伸ばす	0.405377	難しい	0.421625
作家	0.432605	技巧	0.405971	性格	0.395858	嫌い	0.419466
朴英熙（批）	0.429716	感じる	0.402872	全体	0.395023	表現	0.407824
形式	0.429423	創作	0.400098	責任	0.393095	作家	0.404824
月評	0.428295	一回	0.399655	感じる	0.391289	愛	0.384809
無産階級	0.425189	開闢	0.390829	愛	0.3901	流れ	0.381854

（4、5章省略）

6．終わりに

本稿は、「定量分析を媒介とした韓国文学史の再考」という研究テーマに関する筆者の三つ目の試論である。2014年に発表した「作家、メディア、ネットワーク」では、植民地朝鮮に

おける1920年代を「同人(誌)の時代」ではなく、「作家ネットワーク」の時代として位置づけ、近代的な作家の形成過程にみられる人的関係の集団性を、ネットワーク分析を適用したクラスター分析を通して明らかにした[18]。この論文は、小さい同人サークルの離合集散として理解されてきた作家集団を、人的・メディア的な関係を基盤とするネットワークとして捉えなおしたものであり、韓国文学史研究において、統計を基盤とするマクロ分析の適用可能性を示すのに貢献できたと考える。「キーワードとネットワーク」という論文では、上記のようなネットワーク分析をテキストデータの分析にも導入し、特定の雑誌のなかで流動する様々な主題や概念の解明を試みた[19]。植民地朝鮮の代表的な総合雑誌『開闢』の電子テキストから共起する単語群を抽出し、それをアルゴリズムを通していくつかの主題に分類した。この作業によって、主題の網羅的なマッピングを作成できた。意味のネットワークの中で、ロマン主義の源流をなす「生命」、社会主義文学の根幹となる「生活」という主題の位置づけを検討し、それらが互いに領有(appropriation)しあいながら意味を形成していく過程を論じた。厳密に言えば、「キーワードとネットワーク」は、文学史研究というよりは、概念史研究に近いものであった。分析対象を選ぶ際に、ジャンルのような形式的条件や作家、批評家など、文学を構成する主体を考慮しなかった。

本稿は、統計言語学的な方法を導入し、分析の対象を文芸批評に限定した上で、当時の作家、批評家たちが日常的な言語を文学的な言語に転用する過程を捉え直し、批評家の誕生という文学史的な出来事を、よりミクロな観点から分析したものである。最初の意図は、「生活」や「態度」のような批評言語を媒介とする批評家ネットワークや、そのネットワークにおける批評家の個別的な位置を明らかにするところにあったが、力不足でそこまでは至らなかった。

しかし、本稿で『開闢』における批評言語としての「生活」の二重性と、『朝鮮文壇』での「態度」の新しい意味作用を確認できたことは、大きな成果であった。朴商準は、「韓国近代文学の形成と新傾向派」という論文で、新傾向派の場合、批評と小説を分けて考える必要があると主張した[20]。主人公が貧困な境遇に耐えきれず、殺人や放火に走るという設定が多い「新傾向派」の小説と、今・ここを、プロレタリア文学を成立させるための過渡期と捉えていた朴英熙や林和の「新傾向派」批評とは区別すべきであるというのだ。朴商準からすれば、前者の新傾向派の小説は同時代的な文学現象であり、後者はプロレタリア文学を、これから獲得していくべき歴史的構成物として捉えるものである。本論文で明らかにした、日常語としての「生活」が批評言語に転用される過程は、その主張の根拠になり得る。

『開闢』において「生活」は、文芸批評の内と外で同時に用いられた。文芸批評の内部では、主人公の生計や生計を立てるための手段を包括的に指したり、そこに由来する人生観の変

(18) 이재연、2014、「작가、매체、네트워크:1920년대 소설계의 거시적 조망을 위한 시론」、『사이間SAI』第17号、257-301頁。

(19) 이재연、2016、前掲論文、277-334頁。

(20) 박상준、2000、前掲書。

化をあらわしたりするものであった。文芸批評の外部では、主人公の人生観・世界観に注目しながら、文学を特定の理念に基づいて定義し、理論化するために用いられた。批評用語として転用された「生活」は、作中人物の性格や心理、特定の出来事をめぐる創作上の表現方法を分析する際ではなく、主人公が置かれた貧しい境遇の社会・経済的な原因を、歴史的な視点を通して遠景化する際に使われた。つまりこの単語は、具体的な作品分析よりも、批評言説(21)に収斂する傾向が強かった。これはW2Vからも間接的に確認できた。単純出現頻度で最上位に位置していた「生活」が、批評家たちの意味的な共起語を取り出した結果に登場しなかったことから推論できたのである。要するに「生活」は、批評家たちが作品を批評するために用いていた「性格」、「技巧」、「描写」などの単語のみならず、社会的・歴史的な関係をあらわす単語や、他の日常語とも簡単に結合して使われていたのではないだろうか。

それに対し、W2Vの結果からみた『朝鮮文壇』における「態度」は、批評家たちの名前と近い関係にあった。これは合評会という批評形式の特徴から考える必要がある。金基鎮の「近年の文壇の一傾向」のような「月評」形式では、批評家が様々な作品の具体的な特徴から共通点を見出し、範疇化することが可能である。しかし、「合評会」形式でそのような作業を行うことは簡単ではない。複数の批評家がいくつもの作品を同時に論評する合評会の形式は、作品の個別的な特徴に焦点が当てられるように構成されるからである。この形式の中から浮かび上がってくる「態度」の用例は極めて多彩であった。例えば、物語の中で主人公が自らの境遇を乗り越えていく方法、作品に対する作家の姿勢、主人公に対する作家の位置、作家が葛藤を提示し読者に伝える方法など、作家の創作方法全般を評価するための批評用語として機能していたことが確認できた。

『開闢』における「生活」と『朝鮮文壇』における「態度」は、専業批評家がまだ登場していなかった時期に、作家たちが実践した批評実験の様子をうかがわせる。日常語が相互対立・競争・葛藤・転用の過程を経て、専門的な批評言語として機能するようになったことを踏まえれば、これまでの1920年代の批評に対する研究は、「生活」に優越的な地位を与えすぎたと言える。また、「態度」のような新しい批評用語の発見は、「生活」の他にもいろいろな単語が、批評用語としての競争関係にあったことを示唆する。本論文でこのような考察が可能であったのは、W2Vというアルゴリズムのおかげである。今後、定量的なアプローチがメディア分析と文学史研究に新たな地平を開いてくれることを期待する。

翻訳：高榮蘭（こう　よんらん、KO Young-ran）
日本大学文理学部教授
金景彩（きむ　きょんちぇ、KIM Kyongche）
慶應義塾大学外国語教育研究センター助教

(21) 特定の作品を対象としていない批評を指す。メタ的な文芸論はもちろん、批評家が一定期間内に発表された作品を読み、それらの具体的な特徴を抽象化させ、その時期の一般的な傾向を論じたもの（月評、四半期評など）からも「批評言説」がみられる。

【参考文献】

一次資料

김기진、1923、「Promeneade Sentinental」、『開闢』第37号、82-100頁。
――、1925a、「문단 최근의 일 경향」、『開闢』第61号、124-128頁。
――、1925b、「1월 창작계 총평」、『開闢』第56号、1-18頁。
――、1927、「무산문예 작품과 무산문예 비평」、『朝鮮文壇』第19号、7-17頁。
김동인、1920、「자기의 창조한 세계:톨스토이와 도스토예프스키를 비교하여」、『創造』第7号、49-52頁。
김억、1923、「무책임한 비평」、『開闢』第32号、1-5頁。
박종화、1923、「항의 같지 않은 항의자에게」、『開闢』第35号、72-77頁。
――、1924、「갑자문단 종횡관」、『開闢』第54号、111-118頁。
――、1925、「3월 창작평:『開闢』、『朝鮮文壇』、『生長』」、『開闢』」、『開闢』第58号、20-22頁。
양주동、1923、「작문계의 김억 대 박종화 논전을 보고」、『開闢』第36号、54-57頁。
이광수、1922、「예술과 인생、신세계와 조선 민족의 사명」、『開闢』第19号、1-21頁。
――、1924、「소설선후감」、『朝鮮文壇』第24号、78-80頁。
이상화、1925、「지난달 시와 소설」、『開闢』第60号、120-131頁。
이익상、1921、「현진건 군의「빈처」와 방정환 군의「그날 밤」을 읽은 인상」、『開闢』第11号、115-120頁。
――、1925a、「예술적 양심이 결여한 우리 문단」、『開闢』第11号、100-112頁。
――、1925b、「흙의 세례」、『開闢』第59号、44-58頁。
이종기、1923、「사회주의와 예술을 말한 임노월 씨에게」、『開闢』第38号、25-28頁。
임노월、1923、「사회주의와 예술、신개인주의 건설을 창(唱)함」、『開闢』第37号、21- 29頁。
주요한、1924、「문단시평」、『朝鮮文壇』第1号、65-67頁。
최서해、1925、「탈출기」、『朝鮮文壇』第6号、24-32頁。
합평회、1925a、「朝鮮文壇 합평회(第2回):3월 소설 창작 총평」、『朝鮮文壇』第7号、72-83頁。
합평회、1925b、「朝鮮文壇 합평회(第4回):5월 창작 합평」、『朝鮮文壇』第9号、114-126頁。

二次資料

1) 単行本

김영민、1999、『한국 근대문학 비평사』、소명출판。
김윤식、1976、『한국 근대문예 비평사연구』、일지사。
――、1989、『임화연구』、문학사상사。
――、2008、『백철연구』、소명출판。
김현주、2013、『사회의 발견:식민지기 '사회'에 대한 이론과 상상、그리고 실천』、소명출판。
박상준、2000、『한국 근대문학의 형성과 신경향파』、소명출판。

손정수、2002、『개념사로서의 한국 근대 비평사』、역락。

Carpenter, Edward(1898), *Angel's Wings*：*A Series of Essays on Art and Its Relation to Life*、London：Swan Sonnenschein & Co. 온라인 아카이브 https://archive.org/stream/angelswingsaser01carpgoog/angelswingsaser 01carpgoog_djvu.txt.

2) 論文

강용훈、2011、「월평의 형성과정과 월평방식의 변화 양상」、『한국문예비평연구』第34巻、369-402頁。

김우주・김동희・장희원、2016、「Word2vec을 활용한 문서의 의미확장 검색방법」、『한국콘텐츠학회논문지』第16巻 第10号、687-692頁。

이재연、2014、「작가、매체、네트워크：1920년대 소설계의 거시적 조망을 위한 시론」、『사이』第17号、257-301頁。

――、2016、「키워드와 네트워크：토픽 모델링으로 본『開闢』의 주제지도 분석」、『상허학보』第46集、277-334頁。

이철호、2008、「신경향파 비평의 낭만주의적 기원：김기진과 박영희를 중심으로」、『민족문학사연구』第38号、234-263頁。

정효정・배정환・홍수린 외、2016、「정치적 이념에 따른 트위터 공간에서의 집단 간 의견차이 분석」、『한국언론학보』第60巻 第2号、269-302頁。

홍정선、1981、「신경향파 비평에 나타난 생활문학의 변천과정」、서울대학교 석사학위논문。

Mikolov, Tomas, et. al.(2013), "Efficient Estimation of Word Representations in Vector Space," arXiv preprint arXiv:1301.3781. https://arxiv.org/pdf/1301.3781v3.pdf.

［付録］

『開闢』掲載作品評 25 編と『朝鮮文壇』27 編

一連番号	年度 _ 月	雑誌	巻號	通巻	批評家	題目	備考
1	1920_12	開闢		6	黃錫禹	희생화와 신시를 읽고	作品評
2	1921_05	開闢		11	李益相	예술적 양심이 결여한 우리문단 (문단평)	批評家に対する批評
3	1921_05	開闢		11	李益相	玄鎮健군의「빈처」와 방정환군의「그날밤」을 읽은 인상	作品評
4	1921_07	開闢		13	玄哲	고선여감 < 김석송 , 장응진 , 현희운 >	作品評
5	1923_01	開闢		31	朴鍾和	문단의 일년을 추억하야	作品評
6	1923_02	開闢		32	金億	무책임한 비평	批評家に対する批評

7	1923_05	開闢	35	朴鍾和	항의같지않은 항의자에게 (金億과의 2 월호의 논쟁)	批評家に対する批評
8	1923_06	開闢	36	梁柱東	작문계의 金億 대 朴鍾和 논전을 보고	批評家に対する批評
9	1923_08	開闢	38	李宗基	사회주의와 예술을 말하신 임노월씨에게	批評家に対する批評
10	1923_12	開闢	42	廉想涉	문단의 금년 < 올해의 소설계 >	作品評
11	1924_03	開闢	45	朴鍾和	신춘창작평 < 廉想涉과 , 朴鍾和 >	作品評
12	1924_07	開闢	49	廉想涉	선 후에	作品評
13	1924_12	開闢	54	朴鍾和	갑자문단종횡관	作品評
14	1925_01	開闢	55	朴英熙	문학상으로 본 李光洙	作品評
15	1925_02	開闢	56	金基鎮	일월 창작계 총평 (각잡지의 소설평)	作品評
16	1925_02	開闢	56	朴鍾和	< 문단시평 > 작가와 풍속 (金東仁의「명문」에 대해)	作品評
17	1925_03	開闢	57	朴英熙	2 월 창작총평 (소설평)	作品評
18	1925_04	開闢	58	朴鍾和	삼월창작평 (開闢 , 朝鮮文壇 , 생장 :「탈출기」평)	作品評
19	1925_05	開闢	59	金基鎮	신춘문단총관 < 여덜뫼 , 평론 >(소설평 주 , 시평 있음)	作品評
20	1925_06	開闢	60		<< 朝鮮文壇 >> 합평회에 대한 소감	批評家に対する批評
21	1925_06	開闢	60	李相和	지난달의 시와 소설	作品評
22	1925_07	開闢	61	金基鎮	문단최근의 일경향 <6 월의 창작을 보고서 >	作品評
23	1925_07	開闢	61	朴英熙	선후감 (選後感)(「살해」와「두젊은사람」등 4 편선정)	作品評
24	1925_12	開闢	64	朴英熙	신경향파의 문학과 그 문단적 지위 (무산계급문화)	作品評
25	1926_02	開闢	66	玄鎮健	신춘소설만평 (신민 , 開闢에 실린 소설작품 평)	作品評
1	1924_10	朝鮮文壇	1	朱耀翰	문단시평	作品評
2	1924_12	朝鮮文壇	3	李光洙	소설선후감	作品評
3	1925_01	朝鮮文壇	4	方仁根	갑자년소설계일별	作品評

4	1925_01	朝鮮文壇	4	李光洙	소설선후감	作品評
5	1925_03	朝鮮文壇	6	金基鎮	朝鮮文壇 합평회 (제 1 회) - 2 월 소설창작 총평	作品評
6	1925_04	朝鮮文壇	7	玄鎮健	朝鮮文壇 합평회 (제 2 회) - 3 월 소설창작 총평	作品評
7	1925_05	朝鮮文壇	8	廉想涉	朝鮮文壇 합평회 (제 3 회) -4 월 소설창작 총평	作品評
8	1925_06	朝鮮文壇	9	金東仁	소설작법 (3)	作品評
9	1925_06	朝鮮文壇	9	廉想涉	朝鮮文壇 합평회 (제 4 회) - 5 월 소설창작 총평	作品評
10	1925_06	朝鮮文壇	9	田榮澤	金東仁론	作品評
11	1925_06	朝鮮文壇	9	金億	金東仁	作品評
12	1925_06	朝鮮文壇	9	方仁根	金東仁은엇더한사람인가	作品評
13	1925_07	朝鮮文壇	10	金東仁	소설작법 (4)	作品評
14	1925_07	朝鮮文壇	10	方仁根	朝鮮文壇 합평회 (제 5 회) - 6 월 소설창작 합평	作品評
15	1925_07	朝鮮文壇	10	方仁根	朝鮮文壇 합평회 소감을 읽고	批評家に対する批評
16	1925_07	朝鮮文壇	10	廉想涉	朝鮮文壇 및 그 합평회와 나	批評家に対する批評
17	1925_07	朝鮮文壇	10	玄鎮健	朝鮮文壇과 나	批評家に対する批評
18	1925_09	朝鮮文壇	11	方仁根	朝鮮文壇 합평회 (제 6 회) - 7 월소설창작 총평	作品評
19	1925_09	朝鮮文壇	11	李光洙	당선소설선후평	作品評
20	1925_10	朝鮮文壇	12	玄鎮健	신추문단소설평	作品評
21	1925_11	朝鮮文壇	13	朴鍾和	만평일속	作品評
22	1926_03	朝鮮文壇	14	方仁根	2 월소설평	作品評
23	1926_04	朝鮮文壇	15	方仁根	3 월소설평	作品評
24	1926_05	朝鮮文壇	16	金基鎮	4 월의 창작란	作品評
25	1927_02	朝鮮文壇 4(2)		金基鎮	무산문예작품과 무산문예비평 - 동무 회월에게	作品評
26	1927_02	朝鮮文壇 4(2)		朱耀翰	취제의 경향과 제 3 층 문예운동 - 신년호 소설월평	作品評
27	1927_03	朝鮮文壇 4(3)		廉想涉	2 월문단시평	作品評